

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第48回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ（巻第十二 三二二七番歌）

わたらひ
渡会の大川の辺の若歴木

わが久ならば妹恋ひむかも

お正月になると琴の音をよく耳にする。しちりき、龍笛、琵琶、鼓、そして和太鼓。耳にすれば、なぜか心がしんとする。乾ききった土に水がしみるように、全身に何かが流れていく。また、太鼓の響きを聞けばその迫力に血が騒ぐ。ピアノやバイオリンの調べは遠いものへの「憧れ」があるが、まだまだ数え出すときりがない和楽器には、日本人に生まれた自分に流れる何かに気づかされるような感がある。だからなのか、何か一つでも演奏できたらいいのにとずっと思ってきた。

この歌にある若歴木は、若木の「ひさき」で、琴類の材料となるそうだ。山地に自生し、芽は美しい赤色。夏に淡い黄色の花が咲き、葉は食物を包むのに利用する。「のうぜんかずら科のきささげ」であるという説もある。こちらは夏、枝先に円錐花序をつけ、大形の花が咲く。

「渡会の大川のほとりの若歴木よ。私の旅が久しくなれば、妻は恋しさに苦しむだろうか。」いつ帰るとも分からない人を待つにはずいぶん辛抱したことだろう。その分、信じる気持ちも祈る気持ちも深かったのかもしれない。



心を静めるために、また、思いを伝えるために、楽器を手にして月に風に調べを送る。思いは宇宙に舞い、空気をふるわせ、聴く人の心を静かに揺らしていく。

携帯電話で確認すれば、写真まで送られてくる便利な時代になった。けれど、それで心をつなぎ止められるほど人の心は簡単ではない。メールでも、留守番電話でも伝えきれない思いがあふれて、またボタンを押している。不安が人を駆り立てる。そして、歌を口にし、調べに耳を傾ける。

写真は、三重県伊勢市円座町にある南伊勢大橋から見た、宮川である。柿本人麻呂は旅の途中か、または渡会の斎宮（伊勢神宮）に奉仕したのか定かではないが、渡会の大川はこの付近の宮川といわれている。

手始めに篠笛を習うことにした。一日吹いたけれど、音が出ない。あつさりあきらめたが一月後、もう一度手に取った。音が出た。ただそれだけで嬉しかった。「もうすぐ四十」の手習いだ、ゆっくり進もう。いつか思いを空に放てるその日を夢みて。